



『百姓の足、坊さんの足』新美南吉著。あらすじをご紹介します。

貧しい百姓の菊次さんは、雲華寺の和尚さんが米初穂を集めてまわるのにお供していきました。米初穂というのは、今年の秋とれた新しいお米のことで、村のお百姓さんたちはそれを少しづつお寺にささげて、仏様に後の世のことを頼んだのであります。

一日まわって遠くの谷に着く頃には日が暮れてしまい、二人は一軒の家で大好きなお酒をふるまわれます。すっかりいい気分になった菊次さんは山道で石につまずいて腕一杯の米を地面にぶちまけてしまします。ワツと叫んで慌てて米を集めようとすると、和尚さんは「土がまじってだめだ」と言つて、その米を足で蹴散らしてしまします。菊次さんも酔った勢いで片足を出し、和尚さんのまねをしてしまったのです。さて、菊次さんには年老いた母

親がいて、いつも米は百姓の命、米を粗末にすると罰が当たると言っていました。菊次さんは母親に「この足で米を踏んだけれど罰など当たっていない」と豪語した直後、左足に激痛が走ります。それから菊次さんの家では、足の痛みのために上を下への大騒ぎになります。

ところが同じ行いをした和尚さんはピンピンしています。参詣者

百姓の足 坊さんの足

住職樋口祐慈

の前で立派な袈裟を着て、「一粒の米にも仏様がいらっしやるからこぼしてはいけない」と説教しています。菊次さんは内心穏やかではありません。不公平だと天を恨むのでした。

その夜、行灯の火を消してから菊次さんは長い間やみの中で眼をあいていました。そして気づいたのです。菊次さんは百姓です。米を育てる苦勞、おいしさ、値打ち

をよく知っています。だからこそ罰が当たったのです。和尚さんは百姓ではありません。一粒の米の中にどれほどの百姓の苦勞が込められているのか何も知らないのです。知らずにしたことだから、米を踏みにつつても和尚さんには罰が当たらなかったのでしょうか。そう思うともう天を恨む気持ちはなくなりました。「本当にすまなかつたが、本当にすまなかつた」

と菊次さんは白い米に向かつて詫言いました。米をくださった百姓にも詫言いました。天にも詫言いました。地にも詫言いました。母親にも死んだ父親にも詫言いました。

親にも詫言いました。みんなに心の中で詫言いました。いつしか菊次さんは左足から痛みがぬけていることに気がつくのです。足に力が入らず引きずり引きずり歩かねばなりません。痛みが無くなったとだけでもどれほど天にお礼を言ったか知れませんが、その後、菊次さんは40年もせつせと働きました。貧しい百姓も左足が悪いことも変わりませんでし

た。

やがてある年、菊次さんと和尚さんは同じ日に亡くなりました。気がつく二人は両側に紫の菖蒲の花が咲いている長い路を歩いています。路が分かれるところで菊次さんは右、和尚さんは左に進みます。和尚さんは振り返ってびっくりしました。向こうへとぼとぼ歩いていく菊次さんの身体が金色に輝いているのです。足は引きずっていません。まさしく絵や彫物でよく知っている仏様の姿でありました。和尚さんは思わずその後ろ姿に手を合わせるのです。

「詫言」ことは信心の要です。罪に対する痛みであり悲しみであり羞恥する心です。仏教では慙愧（行為に対する反省）・懺悔（生きている動機に対する反省）といいますが、また「無慙愧は名づけて人とせず、名づけて畜生とす」（涅槃経）と指摘します。

ところが自分の罪は見えないものです。自分がいつも正しいからです。知らず知らずに作ってしまった罪が見える感性を養うのが仏法聴聞です。それが人間の姿をした人となるか畜生となるかの分かれ路だと思つたのです。



仏前結婚式

行事写真報告

昨年11月から
今年5月まで

2021年11月6日
新郎・石川諒一さん
& 新婦・桐子さん

新婦の祖父・兵藤希明さんは本龍寺総代と本堂建設委員会を歴任後、本堂完成と御遠忌法要を見届けた後に大往生。幼い頃から子ども日曜学校へ通った桐子さんは「祖父に見守られているこの本堂で挙式をしたい」と希望され新本堂初の仏前結婚式が厳粛に華やかに実現しました。



指輪交換



念珠授与



『ゼクシィ』で紹介されました



三三九度



式杯



仏具お磨き



法話と公演は榎山正樹師、藤原千佳子師、秋田ピアノ教室、佐賀枝夏文師、平田聖子師、西三河雅楽研究会

報恩講

12月2・3・4・5日

献灯献華



お弁当仕立のお斎



お華束作り



仏華立調



音楽
法要



勤行



法話



子ども報恩講



法灯継承の儀



献茶



秋田ピアノ教室の生徒さん



ピアノコンサート



任期満了の第30代同朋婦人会



2022年1月1日

新年修正会



第1部
お屠蘇乾杯



第2部
お屠蘇乾杯



2月3・26日・3月2・4・7・8日開催で47名参加。大豆2.5kg×51樽=127.5kgの手作り味噌が完成しました。





毎月の定例清掃奉仕



正信会役員



恵信尼会Ⅱ



恵信尼会Ⅰ



廿日会役員



同朋婦人会



みどりの会

老朽化していた同朋会館勝手口の靴箱が新調されました。住職手作り。60名分の靴が収納出来ます。同朋会館玄関口の108名分と合わせて合計168名が一度に靴箱を利用できます。

靴箱



ベンチ

本堂建設で撤収していた鋳物製の脚を再利用して休憩場所が出来ました。住職手作りです。



右は表面を薄く削り文字を浮かせた状態。裏面は昔のままにあります。

TOPICS

看板

住職筆の看板が掛けてありましたが、雨風に晒され傷みがひどく平成29年の改修工事に伴って役目を終えました。今回りメイクされ綺麗になりました。

本龍寺同朋会館は昭和59年に建設されました。玄関には前



御本尊が市指定文化財に

◎種別 … 彫刻 ◎名称 … 木造 阿弥陀如来立像 ◎員数 … 一軀 ◎所有者 … 本龍寺
 ◎法量 … 総高〈台座光背含む〉141.0cm 像高67.8cm ◎年代 … 平安時代後期〈推定〉

2022年1月27日付で本龍寺御本尊が安城市教育委員会によって208件目の市文化財に指定されました。平安時代の彫刻〈仏像〉で市内で確認されているものは拙寺御本尊を入れてわずか4軀のみということで非常に希少なものだそうです。報道各社へも情報提供され、1月29日『中日新聞』西三河版に紹介記事が掲載されました。昨年9月18日、調査にあたって下さった小野佳代先生（東海学園大学人文学部教授・岐阜県文化財保護審議会委員）による調査報告〈総括部分のみ抜粋〉をご紹介します。



このたび調査した阿弥陀如来立像は、右腹前で衣をU字形に大きくたわませ、太腿部正面で皺をY字形に浅く刻んでおり、さらに横からみると厚みのないプロポーションをしている。同様の特徴をもつ像としては、たとえば平安時代後期〈12世紀〉の作とされる京都宇治の地蔵院・阿弥陀如来立像や、愛知県春日井市の密蔵院・薬師如来立像があげられる。したがって、本像も平安時代後期、12世紀の仏像と推測される。しかしながら、本像の面部は同時期の像にみられる穏やかでやさしい面相とは異なる点が注意される。本像は平成28年から29年にかけて、京仏師の佐川中定師のもとへ修理に出されており、修理時の木地のあらわれた写真を見ると、面部に別材を削いでいることなどが確認できる。造立当初は彫眼であったと思われるが、のちに面部に損傷を受けたのであろうか、中古の修理時に肉髻部以下、両こめかみより前方の頭部正面に、別作の部分を転用したかと思受けられる。その際に玉眼となったのであろう。頭部正面の製作年代は確言しがたいが、鎌倉時代と推測される。

本像は碧南の鷲塚から移ってきたという伝承もあるようだが、とくに根拠があるわけではない。もし本像が古くから本龍寺に伝来してきた像であるならば、本像の製作推定年代が本龍寺創建期と重なるのは留意される。本像が創建以来の像であった可能性もあるかもしれないが、本像に関する史料がない中では推測の域を出ない。ただし、冒頭で述べた二休が江戸時代初期の本龍寺に聖徳太子御自作の阿弥陀如来立像を祀る以前の旧本尊像であった可能性は考えられよう。ともあれ、本龍寺に平安時代後期、12世紀にさかのぼる古像が伝来したのは誠に喜ばしい。安城市の歴史を考える上でも貴重である。市の文化財に指定し、後世に伝えていくのが望まれる。



あと **が**き

第75号をお届けします。コロナ禍が少し落ち着きました。通常の法話会活動が戻りました。定例清掃の後、各会にお茶を飲みながらお喋りに花が咲きます。今年から新しく役員になった方を中心に先日の法話会の感想等を熱く語り合っている様子に、「お寺が生きている」と実感します。〈頼〉